

年間第十六主日

2016.7.17

ルカ 10・38-42

今日の福音は、わたしたちに馴染み深いマルタとマリアの物語です。特に女性の皆様にとって、教会との関わりが深くなればなるほど、今日の福音のマルタとマリアの話を知るときに、何か、割り切れない思いが残ってしまう感じを持っておられる方が多いかもしれません。教会で何かをしようとすると、どうしても、女性の皆さんの手が必要となります。小教区の教会の活動が活発に行われているかどうかは、今もその教会の女性の信者の皆さんがどれほど教会のために御奉仕してくださるかどうかに掛かっていることに変わりはありません。日本の社会の変化に連れて女性の社会進出の必要性が高まり、それに伴って、小教区の教会の活力も以前に比べると、衰えて来ているように思えるのも時代の流れなのかもしれません。そのような現状の中で、教会のあり方はあまり変わりようがないのも、やむをえないところがあります。教会は今でも一つの家族であることを理想としているからです。いきおい、高齢化の波と女性の社会進出という時代の流れの中で、教会に留まって御奉仕してくださる女性信徒の皆様への負担は以前にも増して重くのしかかって来ています。そのような皆さんにとって、今日の福音のマルタとマリアの話は、何度聞いても、割り切れない思いが残ってしまうのは当然のことです。マルタがいてくれなければ、ことは、前に進まないのです。マルタに徹する御婦人たちのおかげで、今のわたしたちの教会は、活動を続けることが出来ているのです。イエスさまのおことばではありますが、そのおことばの尻馬に乗って、わたしたちもマルタを咎めだてとするなら、わたしたちの教会は立ち行かなくなってしまうことでしょう。

今日の福音のイエスさまのマルタに対するおことばは、はっきりとした指示を与えていますが、マルタへのイエスさまのこのおことばを、そのまま今のわたしたちに向けられたおことばとして受け止める前に、福音書全体の流れの中で、今日の福音の場面を味わってみる方がよいかもしれません。今日の福音の場面には、マルタとマリアとイエスさましか登場しません。イエスさまがなさってくださった奇跡を求めてイエスさまの後に付きまとうに押し寄せてくる群衆の姿はここにはありません。イエスさまの目覚しい働きと、そのイエスさまのもとに押し寄せる群衆の多さに嫉妬を感じ、イエスさまの言動に疑いの目を向ける、イエスさまに敵対し始めた、ユダヤ社会の指導者たちの姿もありません。イエスさまがどこに行かれても、その後につき従った弟子たちの姿もあり

ません。このような場面が語られることは、福音書全体を通して読む時、稀なことであることが分かります。福音書に語られているイエスさまの日々の中にも、このような時があったことを知る事が出来る今日の福音の場面は、わたしたちにイエスさまへの親近感を覚えさせるのではないのでしょうか。エルサレムで待ち受けている受難の死について弟子たちにはっきりと語り始められたイエスさまの、緊迫の度を増すエルサレムへの旅の途中で、このような一時があったことを語る今日の福音は、わたしたちにホッとした感じさえ与えるように思えます。

今日の福音では、イエスさまを我家にお迎えしたマルタとマリアの姉妹だけにスポットが当てられていますが、同じマルタのマリアの姉妹は、ヨハネ福音書の11章にも登場します。そこでは、マルタとマリアの家にはラザロというもう一人の兄弟がいて、病気に罹って死んでしまったそのラザロをイエスさまが四日目に来て蘇らせてくださったことが語られています。マルタとマリアのことを語るこの二つの福音書の箇所はどのように関係しているのでしょうか。今日のルカ福音書の場面には、ラザロの気配さえ感じられません。ラザロがいたなら、当然ラザロがイエスさまをお迎えして、イエスさまのお側近くでおもてなしをしたことでしょう。男性が一家の主人として客人を接待することは、アブラハムの時代からイエスさまの時代まで変わることはなかったのです。ラザロがいない家にマルタはイエスさまを迎え入れ、マリアはそこにはいないラザロに替わって、我家の客であるイエスさまのお側近くに座って、おもてなしをしようとしたのでしょうか。マルタにはそのことが不満であったにちがいません。ラザロのいない姉妹だけの家にも、男性中心のユダヤ社会の習慣が影を落としているようにも思えます。

一家の主人である男性がいない、姉妹だけの家にイエスさまが客となって、もてなしを受けたことは、旧約聖書のエリアの物語を思い起こさせます。その地方一体に飢饉が襲った時、預言者エリアは神の命令によって、サレプタのやもめの家に身を寄せたのでした。薪を拾い集めていたやもめに、エリアは自分のために小さなパン菓子を焼いてくれるように頼みます。すると、その婦人は応えたのでした。家にはわずかな粉と、壺の中に最後の数滴の油しか残ってはおらず、それでパンを焼いて食べてしまえば、後は息子と死を待つだけです。そのように言うやもめにエリアはあえて、同じことを頼み、エリアの求めに応じたやもめの家には、エリアが言ったように、飢饉の間、粉と油が尽きる事がなかったと語られています。やがて、そのやもめの息子が病気に罹って死んでしまったとき、エリアは神に祈って、その息子を生き返らせてやったのでし

た。これは、全くの想像に過ぎませんが、マリアがイエスさまの膝元に座って、そのお話に耳を傾けた時、イエスさまは、この旧約聖書のエリアの物語を聞かせてくださったかもしれないと考えます。マルタとマリアの家でもてなしを受けたイエスさまは、ヨハネ福音書では、その家のラザロを墓の中から蘇らせてくださったのです。「わたしはいのちであり、復活である。わたしを信じる者は死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者は誰も決して死ぬことはない。あなたはこのことを信じるか」とヨハネ福音書の 11 章で宣言されるイエスさまのお声を、今日のルカ福音には語られてはいないけれども、マリアはイエスさまの膝元に座って聞いていたのです。そのようにして今日の福音でマリアが聞いたイエスさまのおことばは、ヨハネ福音書の中で、マルタとマリアの姉妹のために実現したのです。こうしてマルタとマリアの姉妹は、死んでいた兄弟ラザロをイエスさまによって返していただき、新たな家族の絆に結んでいただけたのです。これはわたしの頭に浮かんだ聖書からのおとぎ話に過ぎません。

けれども、教会にとって家族のような絆が理想的であると言うとき、そこには、「わたしはいのちであり、復活である」と宣言されたイエスの復活のいのちが、分かち合われていなければなりません。それだけが、家族であろうとするわたしたちの努力が生み出す軋轢と、家族であるというわたしたちの中の幻影が生み出す混乱からわたしたちを解放し、わたしたちの教会を疲弊から蘇らせる力であるからです。

今日もわたしたちのミサの集いの中に来てくださり、わたしたちがこのミサによってお仕えするわたしたちの主イエス・キリストの復活のいのちに満たされることを願って、このミサをともにおささげいたしましょう。

カトリック高円寺教会  
主任司祭 吉池好高